



川口盛之助氏インタビュー（前編）

2030年の未来はどうなる？ ヒト・モノ・カネは仮想化、人間は どんどん因数分解される

人口減少、超高齢化、少子化、領土問題、中東問題、サイバー戦争など、日本を取り巻くさまざまな社会問題に対して、悲観的な未来を描く人は決して少なくないはずだ。こうした未来に対して「日本は再びくる」と力強く語るのは、日経 BP 未来研究所アドバイザーをつとめ、国内はもちろん、アジア各国の政府機関からの招聘を受け、研究開発戦略や商品開発戦略などのコンサルティングも行っている株式会社盛之助 代表取締役社長 川口盛之助氏だ。近著『メガトレンド』では、精緻で広範な未来予測分析を行い、自民党の国家戦略本部「2030年の日本」プロジェクトにも反映された。同氏に、2030年に向けたメガトレンドを聞いた。

ヒト、モノ、カネが仮想化されてラスト 10 メートルまでくる



川口盛之助 氏

1961年、兵庫県生まれ。慶応義塾大学工学部卒、米イリノイ大学理学部修士課程修了。技術とイノベーションとサブカルチャーを体系化した、ユニークな方法論を展開する。その代表的著作『オタクで女の子な国のモノづくり』は、「日経 BizTech 図書賞」を受賞し、海外4か国語に翻訳される。TEDx Tokyoにおける Toilet Talk は40万回再生という異例の反響を得ており、Yahoo Japan の動画サイトでは世界の傑作プレゼンテーション・ベスト5に選ばれる。戦略コンサルティングファームのアーサー・D・リトル・ジャパンでアソシエート・ディレクターを務めたのちに(株)盛之助を設立。アジア各国の政府機関からの招聘を受け、ブランディングなどの支援を行う。2014年にはマレーシア・マハティール元首相の財団 Asia Pacific Brands Foundation から Brand Laureate Award を授与される。近著『メガトレンド』では、精緻で広範な未来予測分析を行い、自民党の国家戦略本部「2030年の日本」プロジェクトにも反映されている。

—さまざまな形で未来予測分析をなさってきたと思いますが、我々にはいったいどのような未来が待ち受けているのでしょうか？

人文科学、社会科学、自然科学のどの視点から見るかによって変わると思いますが、社会科学的には、「つながる世界」と表現できると思います。ラスト10メートルまで、ヒト、モノ、カネを利用できる土管がやってくるイメージです。たとえば、都内であれば、自分の周囲500メートル以内にクルマをシェアできるサービスが複数あります。移動手段をオンデマンドで調達できるのです。土管が太くなって、自動車という蛇口が、そこまできているのです。

コンビニも同じです。離島や雪深い山村に住んでいれば、食料を何週間分も購入して冷蔵庫に保存しておかなければなりません。コンビニが近くにあれば、とりあえずビール1本入っていれば事足ります。どうしても2本目が飲みたければ、買いに行けばいいのです。コンビニには自分のほしい銘柄もあるし、賞味期限管理もやってくれています。これは、その地域の住民

全員で、ビールを仮想化して持っている状態だといえます。

これが人になればフリーランスになりますし、工場だったらファブになります。お金でさえもクラウドファンディングやレンディングになってくると、商用銀行というバッファも不要になってきます。つまり、ヒト、モノ、カネがすべてクラウドソーシングの対象のモジュールになって、オンデマンドに調達できる単位となる。その間にいた中間業者はいらなくなるのです。この流れは止めようがないと思います。

――人の働き方も変わっていくということですか。

日本だと「非正規雇用」といいますが、米国だと「フリーエージェント」といって、もっと前向きにとらえていますよね。米国では、全就業人口の4人に1人はすでにフリーエージェントです。なぜなら、仮想化したほうが自分の専門性の稼働率が高まるからです。

通常、専門性を上げると稼働率は下がります。会社にとって、特殊な機能は年に数回しか必要ないでしょう。したがって、専門家は真っ先にレイオフされます。しかし、年に数回は必ず必要ですから、専門家を同業他社でシェアすることになります。そうすれば、その専門家も自分の専門性をもっと磨けます。

――ビッグデータの活用によって、専門家へのニーズも危うくなるのではない

でしょうか。

確かに、機械に追いつかれるかもしれないですね。ただ、その前にアジアの安い労働力に追いつかれるかもしれません。たとえば、東大法学部を出て重役候補で入ってきてても、シンガポール大学を出たベトナム人に勝てないかもしれません。社会科学の分野では、シンガポール大学の国際評価ランキングは東大よりはるかに高いですからね。

オープンな世界では星一徹はちゃぶ台をひっくり返せない



「オープン」もキーワードになると思います。オープンな世界では、不条理な権威は生きていけません。『巨人の星』で星一徹がちゃぶ台をひっくり返しますよね。年長であるとか、親であるとか、男だからという理由で、なぜか突然切れてちゃぶ台をひっくり返しても文句をいわれない。

「情報の非対称性」が権威の根源なのですが、ビッグデータの出現でそれが崩れると、権威は失墜します。たとえば部長同士で囲っていた秘密の情報もなくなり、部長の権威もなくなるわけです。

そして、このプロジェクトのこのステータスでは A さんがリーダーだけれど、次のフェーズでは B さんの方が専門性が高いので B さんがリーダーになる、といったことが起きるわけです。

こういって「それは理屈にすぎない」という人がいますが、それはそうではない古いシステムで偉くなった人がいるから、本能的に自己防衛しているだけでしょ。

—IT の世界では、確かに情報の非対称性が失われ、組織がフラットになっている傾向が強いと思いますが、他の分野では、世代が替わらない限り、こうした変化はなかなか起きないのではないのでしょうか。

団塊の世代的なものが決裁権を持っているかぎり、それは業界問わずあると思います。もう 1 つは日本語の壁でしょう。日本語の壁に守られているので、優秀なベトナム人がやってこない。

しかし、もう少し AI が発達して自動翻訳が優秀になったら、それもなくなるはず。そもそも、IT やサイエンスの分野では言語は無関係です。日本

は言語と無関係な分野は強いですよ。サイエンスもエンジニアもそうですし、マンガもそうです。21世紀になってからノーベル賞を取った数は、アメリカに次いで2位ですから。自然科学はとても強いのです。

これから伸びる分野はバイオと脳。人間はどんどん因数分解される

—自然科学分野で注目すべき分野はどこでしょうか。

バイオと脳です。この分野は、トランジスタが開発された1950年代と似ています。1950年代にトランジスタが開発されたことで、その後、日本は大いに儲けることができました。しかし、いまはそれがモジュール化、デジタル化し、中国でも組める時代になり、日本はその部品を作るしかなくなってしまいました。

しかし、バイオと脳は違います。バイオ分野はいまが萌芽期なので、iPS細胞のような要素技術がどんどん出てきます。すると、それを使ったトランジスタのようなものが出てきて、これから50年でS字カーブを描いて成長するでしょう。

脳も同じです。これまで心理学や哲学が扱ってきた分野に計算科学で挑もうとしているので、ブレイクスルー感が非常に強い。たとえば、顧客の満足度を計測できるようになれば、ビジネスの考え方そのものが変わってくるでしょう。

ウェアラブルが注目されている理由もそこにあります。外部の情報をデジタル化して内部に入れ、内部の情報を自分で把握して自らの状態を把握するには、ウェアラブルが必要だからです。フィジカルもそうですが、心の健康管理も含めて、今後、人間はどんどん因数分解されていくでしょう。

川口盛之助氏インタビュー「世界人口が100億人になったら日本化せざるをえない」

さまざまな社会課題を抱える日本。日本の未来はどうか？前編では、日経BP 未来研究所アドバイザーの川口盛之助氏に2030年までのメガトレンドを聞いた。社会科学の分野では人の働き方が変化し、自然科学の分野ではバイオと脳が注目分野だという。後編では、日本のものづくりがどうなっていくのか？また、世界の中で日本はどのように戦っていくべきかについて話を聞いた。

[前編：2030年の未来はどうか？ヒト・モノ・カネは仮想化、人間はどんどん因数分解される](#)

ものづくりのオープン化が進めば小さい組織が救われる



川口盛之助氏

—これまで日本が得意としていた製造業の分野はどうなるでしょうか。

部品がどんどんコモディティ化すれば、重要になるのは、部品を組み合わせ
て新しい価値を生み出すことだけになります。パーツやツール、ライブラリ
がたくさんあって、それを組み合わせてモノを作るレゴのブロックのようになる
わけです。しかも、どんどんショートサイクルになって、小ロットになっていく。
これはつまり、ロングテールそのものです。

3Dプリンタがわかりやすいと思います。3Dプリンタはオープン化された生産
装置です。生産技術そのものがオープン化されたわけですから、あとは「何
を作るか」だけで競うことになります。

イケアなどもそれに近いかもしれません。設計図と必要最小限の部品だけ

が送られてきて、現地で組んでくださいというわけですね。もしかしたら、部品の一部は家庭や近くのホームセンターのようなところで現地調達していただきとなるかもしれません。その方が梱包も楽ですし、配送も早い。効率がいいのです。

それがオープンなモノ作りの世界です。なぜオープンかというと、稼働率が高いからです。稼働率や流動性、回転率は、会社経営の1ページ目になっている概念ですね。

――しかし、そういったモノ作りの世界が到来して、人は幸せになれるのでしょうか。

なれますよ。なぜなら、大企業は10台しか売れないようなモノは絶対に作らない。しかし、オープンなモノ作りの世界では、年に10台売れば十分という会社でもやっていけます。製品を組む装置や材料がすぐに手に入れば、あとはアイデアと誰が組むかだけですから。

それには、日本の大企業が抱えている膨大な特許はぜひオープンにすべきだと思います。大企業には、ライバルの開発を阻害する目的のためだけに取得した不毛な防衛特許が山ほどあります。そのせいで、アイデアの稼働率が非常に悪いのです。優れた企画書も死蔵文書と化して山積みになっています。すべてをオープンにして、大企業は3割とかいわないで、1厘く

らのマージンをとればいい。

そうすれば、多くの人がロングテールのプロシューマになれます。アイデアがあり、必要なリソースがすべてオンデマンドで手に入り、お客さんのリストがあれば、小さい組織が救われます。

—ソフトウェアの世界で起きていることが、現実の世界で、即ちハードウェアでも起きるということですね。それでは大企業はどうなるのでしょうか。

大企業はプラットフォーマーとして最大公約数的なところで技術を磨くことになります。モノ作りがオープン化しても、パーツは必ず必要になりますから。

オープンな世界ではレイトスターターほど黄金期は短い

—中国や韓国などの新興国の動向はどう見えていますか。

中国に関しては、労働人口が頭打ちになって、今後、オーバーヘッドがどんどん重くなっていくので、厳しいのではないかと思います。韓国も苦しんでいますね。

そもそも、オープン化がすすむと、人も活発に動きますから、これまで10年かかっていたものが、どんどんドッグイヤーになり、コモディティ化していきます。日本がアメリカに追いついて、そのあと韓国、中国など新興国が成長す

ると言われてきましたが、そもそもレイトスターターほど黄金期は短いのです。早く追いついたということは、自らはもっと早く追いつかれることを意味しているからです。韓国も日本に対して比較的容易に追いつける部分はもう使い果たしてしまっただけの感があります。その部分は中国やアセアンに追いつかれるのも時間の問題です。

あとになるほど、ケーススタディが多く、ベンチマークをとる手法も確立してくるので、まねをするのが容易になります。しかもオープンになっているので、人も資本も簡単に動く。すると、あっという間に城郭はできるのですが、滅びるのも早い。すぐに追いつかれるのです。

その意味では、日本は恵まれていました。明治時代からコツコツやってきたので、町工場のような産業集積を作れたのです。この蓄積は大きい。ゆっくり成長できた最後の新興国、そして最後の先進国が日本かもしれません。

圧倒的に強いアメリカはこれからもリーダーであり続ける



—アメリカはどうでしょうか。また、アメリカと日本の関係はどうでしょう。

アメリカは別格です。挑戦しようなんて考えない方がいいくらい強い。これからはチャンピオンであり続けると思います。アメリカは何でもシステムで解決します。日本は、ウォークマンやハイブリッドカーのように、ときどきホームランを打ってアメリカに一矢報いますが、一矢報いることができるのは、日本くらいだと思います。

日本は野球でいえば長嶋タイプです。一種の天才です。なぜか知らないけれどできちゃったと。ただし、論理的に説明ができない。なので、職場の雰囲気や尊びますよね。自由闊達で車座になって赤提灯で、と。

これは、養生する場の定義だけをしておけば、あとはブラックボックスでいいという考え方です。環境だけ確保しておけば、キノコが湧いてくるように優れた人やアイデアが自然発生するという方式です。しかし、アメリカはすべてをベンチマークして分解する。したがって、初回は負けても、二回目は絶対に負けないのです。

私も、アメリカの企業をさんざんベンチマークしましたが、ほとんど参考になりません。IBM になろうとか、GE になろうとか考えない方がいい。無理です。日本は、長嶋のような天才肌の人をどうやってマネージするかを考えた方がいいと思います。

サステナブルな世界では、世界が日本化せざるをえない

—将来の日本には、暗い展望を持つ人が多いですね。

そんなことはないと思います。これから、日本はきますよ。なぜなら、サステナブルな社会は、日本的なものでしか生き残れないからです。日本は島国ですが、世界の人口が 100 億人になったら、地球そのものが島国みたいなものです。限られたリソースをどう分け合っていくかを考えなければ、世界はもちません。したがって、世界は「日本化」していかざるをえません。日本もグローバル化するのですが、世界も日本化していくのです。

そもそも、これまでに人口増加を止めることに成功した文明は日本だけで

す。新田開発が止まった江戸時代の前半あたりから、人口増加は止まっています。幕藩体制で人の移動を止めて、内側のエコシステムだけですべてをまかなうことで止めたのです。

—「サステナブル」と言われはじめたのは、ここ 10 年くらいですね。

新興国が爆発的な成長をはじめた途端、これではマズいとなって「サステナブル」という言葉が出てきたのです。文化人類学で、閉鎖系の島嶼(とうしょ)の文化についての研究があります。

そこでは、社会の価値観を決める最も基本となるのは、娘を嫁がせる親が結婚相手に求める条件だといいます。若い女性は、その社会の未来を託す重要な存在です。したがって、「娘をどんな男性に嫁がせたいか」というのは、その文明を知るうえでとてもよい質問なのです。

どこでも共通しているのは「お金持ち」です。その研究でも、その島でお金持ちであることを表わす「飼っている山羊の数が多いい家」という答えだったそうですが、そこには「その事実を口にしない」という条件が付きます。自分の財産を自慢する家には絶対に嫁がせたくないという忌避感があるのです。非常に日本的だと思いませんか。

これは、財産を自慢するような家に嫁がせると、村が発散系に陥って、いずれは崩壊してしまうからです。いま、世界は完全に発散系になっています。

したがって、どこかでは止まらざるをえない。それが 100 億人だといわれていますが、だからこそ、1700 年代に人口を止めた日本の役割は大きいと思います。

――3 月 6 日のセミナーでは、こうした未来に向けて今、日本企業が、そして日本企業につとめる人々が何をすべきかについてお話いただければと思います。本日はありがとうございました。